

第31回 JSCA賞 2020

作品部門

【作品賞】

日本リーテック 総合研修センター

正会員 しんたに こうへい
新谷 耕平 君

略歴

生 年 1971年(大阪府生まれ)
出 身 校 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 修了
主要職歴 1996年 大成建設株式会社 入社
2012年 Samsung C&T Corporation 入社
2016年 株式会社日建設計 入社
主要作品 横河電機金沢事業所/HHK御堂筋ビル/Hundred Circus East Tower



【作品賞】

NIPPO本社ビル

正会員 なかむら のぶる
中村 伸 君

略歴

生 年 1973年(東京都生まれ)
出 身 校 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了
主要職歴 1999年 株式会社日本設計 入社
主要作品 国立新美術館/Ao/神明いきいきプラザ/武蔵野美術大学14号館/武田薬品本社ビル



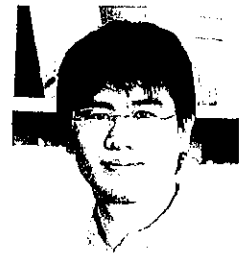
【新人賞】

ショウナイホテル スイデンテラス / キッズドーム ソライ

正会員 えむら てつや
江村 哲哉 君

略歴

生 年 1983年(愛知県生まれ)
出 身 校 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 修了
主要職歴 2008年 Arup 入社
主要作品 大分県立美術館/直島ホール/おりづるタワー/静岡県富士山世界遺産センター



業績部門

【業績賞】

東日本大震災後の構造技術者としての支援・教宣活動

正会員 かとう しげのぶ
加藤 重信 君

略歴

生 年 1948年(宮城県生まれ)
出 身 校 東北工業大学工学部建築学科 卒業 東北大学大学院工学研究科 修了
主要職歴 安藤建設株式会社(現株式会社安藤・間)/カメイ株式会社/
一般財団法人宮城県建築住宅センター/株式会社建築構造センター



第31回 JSCA賞

【作品賞】新谷 耕平 君

日本リーテック 総合研修センター

日本リーテックは、鉄道・道路などのインフラ関係総合電気工事会社である。本建物はその研修施設として建設され、教室や実習室、多目的ホール、宿泊室と食堂などから構成される。建物は地上2階地下1階建てで、平面は約100m×25mと桁行方向に長い。鉄道をイメージして水平方向の陰影を強調したファサードが特徴的である。

平面中央には、居室と廊下に囲まれる形で3層吹き抜けのアトリウムがあり、その屋根は張間方向にかかるケーブル吊り構造とハーフPCa合成スラブを組み合わせた斬新な構造になっている。ケーブルのスパンは15mであり、桁行方向に長いアトリウムに沿って6m間隔の架構が約60mの長さに渡り連続する。ケーブルによる吊り形状は鉄道の架線から意匠的にイメージされて提案されたものであるが、下凸曲面はハイサイドライトと通気確保の目的からも効果的であり、屋上でのバックステイの確保も計画は無理がない。建築計画と構造計画が上手く融合された建築と言える。ケーブルに沿って角度が変わるPCa版に自然光がほどよく反射して、個性的で豊かなアトリウム空間が実現された。

ケーブルによりハーフPCa合成スラブの屋根床板を支持する構造はあまり前例がなく、設計者は、7か月と10か月というタイトな設計と施工期間の中、構想の実現のために多岐にわたる精緻な検討と設計を行った。具体的には、屋内のケーブルと屋外のバックステイのテンションロッドを使い分けて防水性と耐候性の確保に配慮したことや、鉛直地震によるケーブルの張力変動を考慮した検討、一部のケーブル破断にともなう冗長性評価、ケーブルと鉄骨部材あるいはハーフPCa合成スラブとの接合詳細の強度と美観の両側面に配慮した設計、ジャッキダウンと支保工の組み合わせによる短工期の施工方法の検討などである。

アトリウムの構造は本建物の最大の特徴であるが、それ以外にも100mの横連窓外壁のコンクリートの品質管理やひび割れ制御、モックアップによる陰影や防汚性能の確認など、およそ必要と考えられる検討を高いレベルで包括的に遂行した。以上のように、応募者の新谷氏は、高度な技術力を駆使して、本建物において個性的な空間創出を主導したことから、作品賞受賞者にふさわしいと判断した。

(高木次郎)

<建物概要>

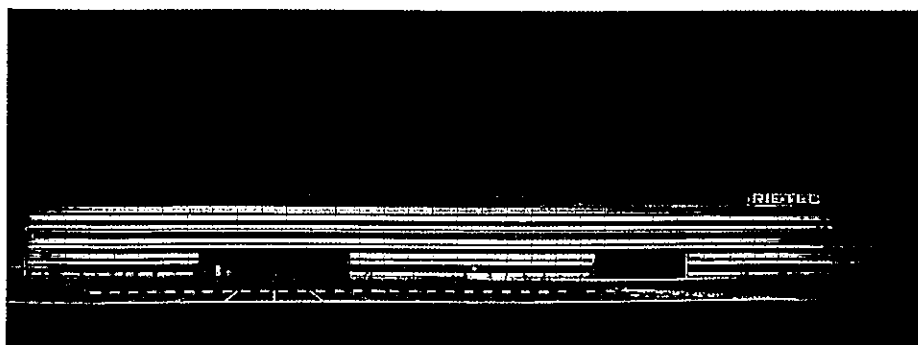
建物名称	日本リーテック 総合研修センター
所在地	茨城県取手市ゆめみ野4-2-1
主要用途	寄宿舎・その他(研修所)
建築主	日本リーテック株式会社
設計・監理	株式会社日建設計
施工	東鉄工業株式会社
建築面積	3,759㎡
延床面積	7,438㎡
階数	地上2階、地下1階
最高高さ	13.93m
主要構造	RC造・一部S造 屋根:ケーブル構造

<構造概要>

本建物は電気設備工事会社である事業者が、合併10周年を記念して建築した研修所である。主に、鉄道・道路などのインフラ関係の電気設備工事に関して、座学だけでなく泊まり込みで実技研修を行う研修所である。事業者からの要求として、①事業者自らが作り上げるプラットフォームとしての研修所となること、②人を育てる交流空間を内包すること、③10周年の記念に開所するためにローコストかつ短工期であること、の3点が挙げられた。これらの要求に対して、まず、建物自体を低層として、かつ、屋外実習エリアに沿って長い建物とすることで、短工期を実現できるようにした。その上で、内部に3層吹き抜けのアトリウムを設けて諸室が交流空間で繋がるようにし、内部はほぼコンクリート打放し仕上げでスケルトンに近い内装とした。事業者が日常業務で扱うケーブルを建築の主題とし、アトリウム上部に構造ケーブル吊り構造によるハーフプレキャスト合成スラブ(以下、PCaスラブ)で下に凸形状の曲面屋根を設けて、アトリウム空間への採光と自然換気の高効率化を図っている。なお、屋根面における防水はPCaスラブ上部に金属屋根を葺いて処置している。

構造ケーブルの設計においては、PCaスラブ自重による張力を長期許容張力をやや下回る程度に設定し、鉛直地震時の張力上昇が短期許容荷重を上回らないこと、逆に強風時の吹上げ荷重でも張力が線形範囲下限(破断荷重の10%程度)を下回らないこと、を設計条件としてケーブル断面を選定した。当初は一本の連続ケーブルによる吊橋形式のケーブル配置を考えていたが、万が一の破断に対するリダンダンシーを考慮し、支持柱を境として外部をテンションロッド、内部をケーブルとする構成とした。PCaスラブとケーブルの取り合い部(ファスナー)は、逆U型の金物でケーブルに載せる形式とし、アトリウムへの部品落下が起こらないディテールとした。ケーブル端部では、タイロッド用ガセットプレートとケーブル端部ネジ式金物の取り合いを一体化して柱に埋め込むディテールを開発した。

構造ケーブルとPCaスラブを現しにして組み合わせる新たな建築表現に際し、ケーブルの安定性やアトリウム空間に対する安全性などを慎重に配慮して実現した下凸形状曲面屋根は、研修生が行き交うアトリウムに彼らが業務で扱うケーブルによる内観を構築して、技術者に成長していく想い出の場を与えている。



外観

(撮影 雁光舎・野田東徳)



内観

(撮影 新谷耕平)

第31回 JSCA賞

【作品賞】中村 伸 君

NIPPO 本社ビル

株式会社 NIPPO は道路をはじめとする様々な都市基盤をつくってきた会社であり、道づくりのトップランナーである。本建物は東京駅に直結する八重洲通り、立体交差する首都高速道路、人工地盤上の公園などの様々なインフラが立体的に結節する位置に本社ビルとして建設された。北側と東側の道路に面するファサードは風向や日射方位を考慮した鋸型のガラスカーテンウォールで、透明感のある開かれたオフィスビルの印象を受ける。

建物は 21m×29m の平面形であるが、柱を首都高速道路側外壁面より 4m 内側に設け、外装をキャンチレバーで支えている。自由度の高いこの空間には上下階を繋いだ複数の階段とミーティングスペースを設け、公園や首都高速道路に隣接した眺望の開けた開放的な「ミチゾーン」を創り出している。首都高速道路側の片持ち梁構造は、既存地下躯体や江戸時代の護岸を避けた位置での地下計画とも適合した構造計画となっている。また、本社ビルとしての BCP 対策から免震構造を採用し、耐震安全性を高めている。

上部構造の架構計画は応募者による架構のイメージスケッチから始まった。耐震要素となる心棒と執務空間を構成する柱および梁、窓側の 4m の片持ち梁、曲げ戻しを期待する軸力柱をスチレンボードで作った型枠に石膏を流し込んで製作した模型で、意匠設計と確認しながら設計を進めたとのことである。型枠転用のメリットを活かしたプレキャストプレストレスト造 (PCaPC 造) を採用し、PC 鋼線の配線や緊張端の納まり、サッシ受け金物の先行埋め込みなどにも工夫がみられ、施工会社も兼ねる施主 NIPPO と多くの話し合いの場が持たれたことを窺わせる。空調システムに床吹き出しを採用することで天井面には直接 PCaPC 造の梁が見え、モーメント勾配に応じた梁形状と外壁側に向かって絞られた梁成と梁幅が開かれた眺望に一役かっている。プレストレスの特徴である非線形弾性の性状を取り入れた構造解析、クリープや熱伸びによる動きを考慮したアウトースキンの目地幅の設定などにも配慮し、トータルでの建物の安全性を高めている。

建物としては単純なオフィスビルであるが、応募者のエンジニアリングに関するアイデアと構造システムが建築計画や設備計画と融合している。ワークスペースと周辺環境の間にある回遊性を持ったミチゾーンが様々なつながりを演出していると感じ、ここに JSCA 賞作品賞にふさわしいと判断した。

(黒川泰嗣)

<建物概要>

建物名称	NIPPO 本社ビル
所在地	東京都中央区京橋 1-19-10
主要用途	事務所
建築主	株式会社 NIPPO
設計・監理	株式会社日本設計 株式会社 NIPPO
施工	NIPPO・大日本土木建設工事共同企業体
PC 工事	オリエンタル白石株式会社
建築面積	584.75㎡
延床面積	5,397.91㎡
階数	地上 10 階、地下 1 階
最高高さ	47.01m
主要構造	PC 造・RC 造 免震構造

<構造概要>

東京駅に直結する八重洲通り、これと立体交差する首都高速道路、その上部人工地盤上の公園、NIPPO 本社ビルは、さまざまなインフラが立体的に結節する位置にある。NIPPO は道路をはじめとするさまざまな都市基盤をつくってきた会社であり、道づくりのトップランナーである。この道=「ミチ」を「さまざまな要素をつなぐもの」と考え、「ジャンクション」を設計コンセプトとして捉えた。周囲の都市環境と建物のワークスペース全体をつなぐミチ。ミチは場と場をつなぐだけでなく、それぞれの場が有する個性や特性をつなげていく。ミチが生み出す「つながり」をワークスペースの「創造的なつながり」に発展させ、架構計画につなげながら、この地ならではの、NIPPO ならではのワークスペース=ジャンクションスペースを実現させた。

設計が始まった 2015 年 3 月我々は建設地に足を運ぶことから設計をスタートした。立地特性は北側、東側は非常に開かれた眺望であり、この立地特性を最大限に活かす架構計画を提案することが構造設計者の役割であると考えた。マンションの建つ西側には耐震要素となる心柱を配置して耐震性を確保し、開かれた眺望を獲得できる首都高速側 (北側・東側) に向かって、心柱から梁せいを絞って開放感が増す架構計画を提案した。構造種別は施工会社ならではの素材を活かした空間を表現するために、プレキャストプレストレストコンクリート造 (以下、PCaPC 造) を採用した。梁断面は PCaPC 造により長期や水平時のモーメント勾配に応じた形状とすることで有機的なリズムを与える空間とし、更には、免震構造を採用することで架構計画の自由度を向上させた。

2018 年 6 月竣工を迎えた NIPPO 本社ビル。ワーカーは上下階の移動時にストレスなく外周部の階段を利用している。また、週末の夜には照明を点灯し、ダブルスキンによる内部のアクティビティと PCa 梁の連続性を積極的に街の明かりに映し出している。1 枚の架構スケッチからはじまった設計は、関係者の方々との多くの議論により、NIPPO ならではのワークスペース=ジャンクションスペースを実現し、竣工後も親しまれている。



外観



内観



全景

(撮影 川澄・小林研二写真事務所)

第31回 JSCA賞

【新人賞】江村 哲哉 君

ショウナイホテル スイデンテラス / キッズドーム ソライ

庄内平野の美しい水田風景の上に浮かぶ美しい佇まいのホテルとそれに隣接する全天候型遊戯施設である。プリツカー賞受賞の世界的建築家・坂茂氏の意匠設計によるこのホテルは、雑誌の表紙を飾ったこともある華のある建築物だ。

複数の棟からなるこの施設には、スチールのテンション材を併用したスパン16mの木質折版構造屋根や、規模とシステムが異なる2種類の木造ドーム（スパン35mおよび18m）、LVL斜め格子による耐力壁など、魅力的な木質系の要素が随所に散りばめられている。それらは決して一筋縄に設計できる代物ではないものばかりである。

特に木質構造の場合、鋼材の溶接やコンクリートの打継のように母材と同等の強度や剛性を発揮する現場接合は事実上なく、それ故に、加工形状や搬入単位といった施工的制約や、欠損の程度による部材性能低下、接合金物を用いた場合の剛性低下等に対する工学的判断など、設計者として考慮しなければならない事柄が多い。湾曲集成材フィーレンデールアーチによるドーム架構システムは梁の重ね方やジオメトリなど建築家からの強い提案によるものと聞かすが、部材や節点に生じている力のオーダーを把握し安全と言える接合ディテールをデザインするのは他でもなく構造エンジニアである。庄内地方という豪雪地域における偏荷重への想像力もまたエンジニアに求められる資質ではあるが、ここでは諸外国の基準を参照しながら14パターンの積雪偏荷重を用いたという。スパン35mを有するキッズドーム ソライでは、住宅用の木質ラーメン用金物（既製品）を採用するなど、見えがかりと構造性能を両立させながらコストを抑える工夫も見られた。

このように、難しい建物をまとめ上げる力量・ポテンシャルの高さが認められたわけだが、その一方で、現地審査における審査員からの多彩な質疑（部材の勝ち負けや施工手順に起因する実態とモデルとの差異、バットレスとタイバーあるいはスラストリングと壁柱といった同目的の要素の関係、高湿度環境下での部材設計の考え方等々）に対する応答には全体的に物足りなさが残ったのも事実で、作品賞との差はその点にあったと言える。

設計者としてまだ粗削りな部分も見受けられるが、現時点での総合力を含め今後の活躍が期待できる力量の持ち主であることは十分に認められ、JSCA賞新人賞にふさわしいと判断した。

(満田衛資)

<建物概要>

建物名称 ショウナイホテル スイデンテラス / キッズドーム ソライ
所在地 山形県鶴岡市北京田字下烏ノ巣23-1 / 6-1
主要用途 ホテル / 保育所・体育館
建築主 ヤマガタデザイン
設計監理 坂茂建築設計
構造設計 Arup
施工 サイエンスパーク特定建設工事共同企業体
建築面積 5,061㎡ / 1,412㎡
延床面積 9,087㎡ / 2,096㎡
階数 地下1階地上2階 / 地下1階地上1階
最高高さ 10.6m / 9.9m
主要構造 RC造+S造+木造

<構造概要>

このプロジェクトは、6棟の建物によって構成される一体の開発である。施主のヤマガタデザインは、地域の力によってまちを作り上げていくことをミッションとした若い地元の企業である。水田に囲まれた豊かで美しい田園地帯で、建築家の坂茂が目指したのは風景に馴染む低層の木質構造である。木造としては厳しい積雪荷重条件(1.5m)となっているが、4種類の異なる構造を、状況に応じてRCや鉄骨との混構造とし、柔軟に各条件に対応するよう設計した。

<ショウナイホテル スイデンテラス>

分棟形式のホテルである。ロビー、レストラン、事務所機能などを有する「共用棟」、合計143の客室を有する3つの「宿泊棟」、温泉を利用した共用風呂の「大浴場」、そしてそれをつなぐ3つのブリッジからなる。

「共用棟」：木質折版による架構がスパン16mの切妻屋根となる構造で、2階外周の鉄骨フレームと、1階のRC架構と組み合わせ全体を組み上げている。厚み90mmのカラマツ集成材を高い剛性と耐力を有するフルスレッドビスの斜め打ちで互いに接合し、木質の折版を構成している。鉄骨フレームには端部接合をラグスクリューボルトとしたLVLブレース組み込むことで地震力を負担する計画とした。

「宿泊棟」：グリッドにのったシンプルな集成材の軸組に構造用断熱パネルの屋根を乗せた架構を、外周が片持ちとなったRC基礎の上に建てている。共用棟とは、H形鋼によるフィーレンデールトラスによるブリッジにて接続している。

「大浴場」：ベイマツの湾曲集成材を用いた3方向のフィーレンデールアーチによる球面ドームを、鉄骨によるリングビームに乗せた構造である。アーチの交差部は相欠きとビス、ボルトを併用し、応力の伝達を可能にしている。

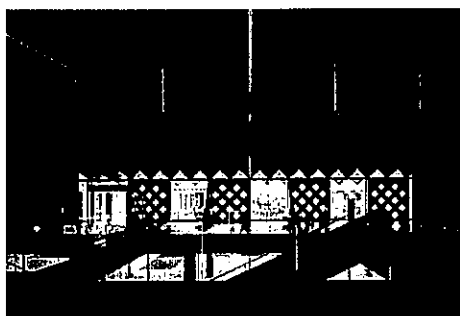
<キッズドームソライ>

1階には巨大な遊具が設置された無柱の一室空間となる「アソビバ」と、地下1階には1000種類以上の材料や道具がある「ツクルバ」を有し、子どもたちが遊び創造力を発揮できる施設を目指している。

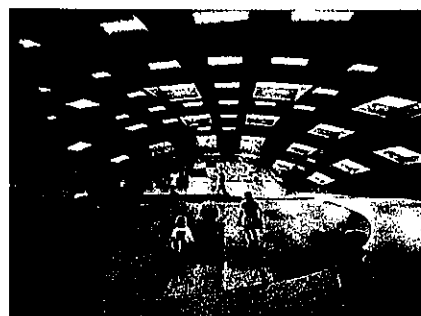
厚み45mmのスギLVLをビスで一体化しボックス断面とし、35mをスパンする2方向の球面ドームを形成している。部材が直交する接合では、両方向に軸力も曲げモーメントも伝達できるよう、ラグスクリューボルトを用いた金物を組み込んでいる。リングビームは木質ドームの多くの支点になりつつスラストによる引張力を負担するため、2本のH形鋼を埋め込んだSRC断面とした。



ショウナイホテル外観



ショウナイホテル内観



キッズドームソライ内観

(撮影 Hiroyuki Hirai)

第31回 JSCA賞

【業績賞】 加藤 重信 君

東日本大震災後の構造技術者としての支援・教宣活動

構造設計者は、日頃、地震や台風などの災害を意識しながら構造設計を行っているが、いざ大災害が起こった時に何ができるのだろうか。今までも、構造設計者は地震後に応急危険度判定などの貢献や、それぞれが設計に関わった建物の被害調査や修復依頼の相談に乗ることなどを行ってきた。今回の応募業績は2011年の東日本大震災の発災後の活動を対象としたもので、応募者はJSCAの東北支部長という立場で会員の精力を結集し、被災地の構造技術者として従来の取り組みを超えたさまざまな活動を展開した。

まずは行政からの依頼により応急危険度判定に応じたが、応急危険度判定は初期段階での危険度の判定でありある種の限界が伴い、市民・所有者にとっては継続使用や補修に関して専門家を頼りにしたいことが多くある。このような要望に対して専門家集団としてさらなる相談への対応を行い、特に仙台市卸町地区の約340棟の建物被害調査を実施し、被害調査を通じて市民や建物所有者と行政との意識の乖離などについても明らかにした。支部の会員は自らが被災者である者も多かったが、応募者の強いリーダーシップのもとで、136名の会員がそれぞれの可能な範囲で活動に参画した。

また、被災後のさまざまな困難な状況の中で、次世代・他地域の構造技術者に被害状況を記録として残すという活動を行い、震災1年後に107事例を網羅した被害報告書をまとめて各支部、団体、大学などに寄贈している。学会などの調査報告書は研究者の目線であらわれることが多いが、構造技術者の視点で被害報告をまとめたことは特筆されることであり、被災地のJSCA会員でなければならないことと評価できる。

JSCAのこのような活動は行政からも信頼を受け、2014年には仙台市とJSCA東北支部の間で大地震発災後の協力についての協定が締結されている。自治体と構造専門家団体の大地震時後の協定締結は全国で初めてであり、その後は東京都とJSCAとの間でも協定が結ばれるなどしているが、応募者の活動はその先駆けと位置づけられる。

応募者らの活動はJSCAや各県の建築士会から注目され、被害教訓や地震後の活動を伝える講演依頼を受けることとなる。応募者は2011年から2017年にかけて全国各地で30回以上の講演活動を行い、全国のJSCA会員の意識向上にも寄与してきた。

以上のように、応募者の活動は被災地の構造技術者としての立場から構造技術者やJSCAが社会に対して果たすべき役割を示してみせたものであり、JSCA賞業績賞の授与に値するものと評価できる。なお、本業績の活動には多くの支部会員が関わっており、表彰は単名でよいかとの議論があったが、活動の呼びかけや遂行において応募者の果たした役割は絶大であり、支部会員の賛同もあることより単名での表彰がふさわしいと判断した。

(金箱温香)

<業績の概要>

東日本大震災の発災から9年の月日が流れた。被災地に居を構えるJSCA会員として、この地震とその時に構造技術者として行った活動を記憶に残さなければならないという思いがある。

当時、我々は「社会貢献」という言葉とは関係なく、ただ構造技術者として当たり前の事という意識で活動していたと思っている。しかし、時を経て考えてみると、自分自身が被災者であることを顧みずに活動した会員、交通機関が停止しており、ガソリン事情も逼迫しているにも関わらず遠方から駆けつけてくれた会員がほとんどであり、単なる「当たり前」ではなく、社会的に我々の職能でなければできないということに対する使命感という各自の高い意識に裏打ちされたものがあつたことが蘇ってきた。

このことは感動的であり、この感動とともに活動した記録を長く伝え、再認識する必要があると考えた。そこで、発災10年目に向けたマイルストーンの意味合いも含めて、JSCA賞業績賞に応募することとした。

本業績は東北支部の多くの会員とともに成し遂げたものであるが、東北支部会員の賛同と理解を得て私が代表として単名の応募となった。これらの活動を支えていただいた全東北支部会員、ならびに御支援をいただいた多くの皆様に改めて心から御礼申し上げます。

<主な支援・教宣活動>

- ・ 応急危険度判定への支援
福島県、岩手県、仙台市において、JSCA東北支部会員延べ626名の協力
- ・ 民間ベース非木造建物の調査
宮城県建築士事務所協会、仙台構造事務所協会との三者協力で約250棟の調査(有料)
- ・ 卸町地区悉皆建物調査と分析
調査対象棟数:375棟 JSCA会員を中心として延べ130名で調査と分析
- ・ 鉄骨置き屋根体育館の被害調査と解析の支援
建築研究振興協会、建築研究開発コンソーシアムとの調査、解析、出版に協力
- ・ 「2011年東北地方太平洋沖地震被害報告書」の出版
JSCA東北支部単独で出版 発行部数1800部
- ・ 仙台市とJSCA東北支部で「災害時における大規模な建築物の応急危険度判定の協力に関する協定」の締結
全国初めての自治体と構造専門家団体との協定締結
- ・ 東日本大震災の概要、被害、教訓等を伝える講演活動
JSCA支部、AIJ、建築事務所協会、企業等からの依頼で全国で30回以上の講演活動
- ・ 東日本大震災の伝承のためのパネルディスカッション
「東日本大震災から5年」をテーマに、JSCA東北支部と建築学会東北支部の共催で、市民、学生も対象とし、東日本大震災の伝承と、減災、備えの大切さを訴えた。

活動年表

2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
応急危険度判定	鉄骨重層根拠調査・解析への協力				パネルディスカッション		
民間ベース調査	地震被害報告書		仙台市協定				現在に至る
卸町地区建物被害調査・分析				仙台市と応急危険度判定・補修困難者一時滞在施設安全確認に関する協議			
			講演等活動				



東日本大震災の伝承のためのパネルディスカッション

■第1次選考(書類審査)と現地審査およびヒアリング

本年の応募数は、作品部門18件、業績部門5件であった。2019年11月11日に全委員(8名)出席のもとで第1次選考(書類審査)を行った。公平を期すため、委員は関係する応募作品・業績に対して発言および投票を行わないこととし、投票は記名、評価は得票率(各応募作品・業績への投票参加者数に対する得票数の割合)によることとした。

作品部門では、各応募作品に対する委員からの意見表明と議論の後、まず現地審査対象とするに相応しい応募作品に対してひとり8票以内で投票を行った。次に2票以上を獲得した応募作品13件に対してひとり5票以内で第2回目の投票を行った。その結果をふまえて、得票率が上位のものから8件を現地審査対象とすることとした。業績部門では、各応募業績に対する委員からの意見表明と議論の結果、2件をヒアリング対象とすることとした。

現地審査およびヒアリングを2019年12月14日から2020年3月15日の約3か月の間に行った。対象となった応募者と応募作品・業績を以下にまとめる。

・作品部門(受付順)

- 新谷耕平 「日本リーテック 総合研修センター」
- 河合正理 「東京都庭園美術館レストラン」
- 吉原正 「石神井体育館」
- 一色裕二 「CHANEL GINZA NAMIKI」
- 中村伸 「NIPPO本社ビル」
- 鈴木将司 「坂東市庁舎」(※)
- 福山弘 「安永寺」
- 江村哲哉 「ショウナイホテル スイデンテラス / キッズドーム ソライ」

(※) 施設側の諸事情により現地審査の都合がつかず辞退された。

次回以降の再応募を期待する。

・業績部門(受付順)

- 加藤重信 「東日本大震災後の構造技術者としての支援・教宣活動」
- 江尻憲泰 「Small Structures ~小さな構造設計作品群~」

■最終選考

2020年3月18日に全委員出席のもとで最終選考を行った。第1次選考と同様に公平を期すため、委員は関係する応募作品・業績に対して発言および投票を行わないこととし、投票は記名、評価は得票率によることとした。

作品部門では、現地審査時のプレゼンテーション資料および議事録をもとに作品概要を再確認した後、各応募作品について委員が現地審査をふまえて評価を述べた。作品賞、奨励賞、新人賞の位置付けを再確認した上で、順番に選考を行った。

作品賞は、各委員の持票を2票以内とした投票の結果、新谷耕平氏と中村伸氏が他に大差をつけて高い得票率を獲得した。この結果をもとに議論し、委員の総意で両名を作品賞に推薦することを決定した。

奨励賞は、各委員の持票を2票以内とした投票の結果、高い得票率を獲得した応募作品がなかったため、最も得票数が多かった1件について再審議のうえ挙手による再投票を行ったが、得票率は変わらなかった。この結果をもとに議論し、委員の総意で奨励賞への推薦は該当なしとすることを決定した。

新人賞は、要件を満たす応募者が1名であったため、挙手による投票とし、江村哲哉氏が大多数の票を獲得した。この結果をもとに議論し、委員の総意で江村氏を新人賞に推薦することを決定した。

業績部門では、ヒアリング時のプレゼンテーション資料および議事録をもとに業績概要を再確認した後、各応募業績について委員がヒアリングをふまえて評価を述べ議論し、委員の総意で加藤重信氏を業績賞に推薦することを決定した。

■総評

本年の応募数は、作品部門と業績部門を合わせると23件であった。前回(26件)及び前々回(22件)に引き続き、20件を超える多数の応募があったことは、とてもよることばいことである。まずは熱い思いでご応募いただいた皆さまと、これまでJSCA賞の活性化のために尽力してこられた関係者の皆さまに感謝の意を表したい。

本年の応募者を年齢別に見ると、30代が8名、40代が11名、50代が5名、60代が1名、70代が1名と、若い人からベテランに至るまで実に幅が広く、JSCA賞の価値が全世代に浸透しているとすれば、とてもうれしいことである。一方、応募作品の用途は、戸建て住宅(1件)、集合住宅(2件)、学校(1件)、図書館(1件)、寺院(1件)、スポーツ施設(2件)、庁舎(3件)、店舗(1件)、レストラ(1件)、事務所(1件)、ホテル(1件)、駅舎(1件)、駅前広場(1件)、研修施設(1件)と多岐にわたっていた。応募業績の内容も、大震災後の支援活動、制震改修、新システム開発と応用、木質構造の可能性、小さな構造設計作品群とこれもまた多様であった。これがJSCA会員の皆さまの活躍の場の広さと貢献度の高さゆえとすれば、とてもほろこしいことである。

作品部門の書類審査では、コンセプト・素材・形態・システム・ディテール等が独創的でインパクトがあり、建築計画や環境計画とバランスよく融合した応募作品が高く評価された。書類審査で特に評価が高かったのは、新谷耕平氏によるケーブル吊り構造とハーフPCa合成スラブを組み合わせた他に類をみない屋根構造を有する作品と、江村哲哉氏による折版屋根・ドーム屋根・斜め格子耐震壁などに多様な木質材料を適材適所に用いた作品であった。一方、現地審査では、応募作品の真価はもちろんのこと、会話を通じて構造設計者としての資質や技量、思想や熱意、思考力や判断力、構想力や実現力などが問われることとなる。現地審査で特に評価が高かったのは、書類選考でも高い評価を得ていた新谷氏に加えて、中村伸氏によるPCaPC造の柱梁構造と透明感のあるファサードを融合させた作品であった。

新谷氏の応募作品は、ローコスト・短工期にもかかわらず、コンセプトが見事なまでに具現化されており、そのプロセスにおける新谷氏のすぐれた思考力・判断力・創造力を認めることができた。

中村氏の応募作品は、本人による一枚のスケッチからはじまっている。それがそのまま具現化されたわけではないが、中村氏の熱意が施主や建築家に良い影響を与えることで、質の高い建築づくりに繋がったと思われる、中村氏の存在の大きさを強く感じさせてくれた。

江村氏の応募作品は、委員の多くが書類審査時にイメージした通りの質の高い建築であった。建築家の意図を翻訳し、木質系が多様な形態とシステムおよびディテールへと収束させた江村氏の手腕は確かなものといえ、将来を大いに期待させてくれた。

業績部門では、応募業績がJSCA賞表彰規則に示された業績に該当するか否かをめぐる議論が多かった。それを見極めるのはとても難しいことであるが、委員は一つひとつの応募業績に真摯に向き合い議論を重ねた。書類審査で応募業績5件からヒアリング対象2件に絞り込まれたのも、そのような議論の末であった。書類審査とヒアリングを通して極めて評価が高かったのは、加藤重信氏であった。構造技術者の職能向上や社会的活動の活性化に多大なる貢献をされたことはもとより、今後JSCAは何をすべきかを問う極めて貴重な業績といえた。

総じて、今回の応募作品・業績は、多種多様で質が高く学ぶところの多いものばかりであった。応募者の皆さまが、これからもよりいっそう情熱を持って邁進されることを大いに期待する。

(柴田育秀)

第31回 JSCA賞委員会

- 委員長 柴田育秀(Arup)
- 副委員長 金箱温香(尚金箱構造設計事務所)
- 委員 奥野親正(鋭久米設計)、黒川泰嗣(鹿島建設)、高木次郎(首都大学東京)
- 鍋島千恵(TNA)、人見泰毅(鋭日本設計)、満田衛賢(京都工芸繊維大学)
- 担当理事 小西泰孝(小西泰孝建築構造設計)

第31回 JSCA賞委員会WG

- 主査 浜田勇気(協竹中工務店)、木下洋介(協木下洋介構造計画)
- 小林直樹(協松田平田設計)、斎藤慶太(協アール・アイ・イー)

第32回(2021年)JSCA賞募集

一般社団法人日本建築構造技術者協会は、下記の如く第32回(2021年)JSCA賞の応募者を公募いたします。会員の皆さまの積極的な応募をお待ちします。応募要項等はホームページをご参照ください。

- 募集期間 書類提出2020年7月1日~10月末日 ●表彰式 2021年6月 通常総会時
- 授賞内定 2021年4月末(予定)

JSCA賞表彰規則(抜粋)

1999年3月25日制定
2018年6月7日改訂

(目的)
第1条 建築がその時代的・社会的な役割を果たしていくためには、建築構造設計者及び技術者がその職能を十分に発揮することが不可欠である。一般社団法人日本建築構造技術者協会は、建築構造の設計・監理等の分野で、優れた成果を発揮した者を表彰することにより、その職能を顕在化させ、技術の発展と活動の活性化を図り、建築の質の向上に資することを目的とした賞を設ける。

(賞の名称)
第2条 賞の名称はJSCA賞とし、作品部門と業績部門に分ける。作品部門には作品賞、奨励賞及び新人賞を、業績部門には業績賞を設ける。

(賞の対象者)
第3条 作品部門の対象者は、構造技術により高い構造性能を確保し、建築の価値を高め、環境に配慮するなどの優れた作品(建築、工作物など)を実現した構造設計者とし、単名を原則とする。
(1) 作品賞の対象者は、極めて優れた作品を実現した構造設計者とする。
(2) 奨励賞の対象者は、特に優れた作品を実現した構造設計者、もしくは独創的な構造アイデアの適用、地域性を活かした提案、生産性への配慮などの特定のテーマにおいて卓越した技量が認められる作品を実現した構造設計者とする。
(3) 新人賞の対象者は、優れた作品を実現し、一層の活躍が期待される若手構造設計者(応募締切日で40才未満の者)とする。
2 業績部門の対象者は以下の者とする。
(1) 構造に関連した分野で、構造設計者あるいは技術者の職能向上や社会的活動の活性化に貢献した者。

(2) 卓越した構造材料、構造システム、構造ディテール等を開発し、その普及に寄与した者。
(3) 既に技術の一連の応用により、独自に建築構造を創出、あるいはその技術の普及に貢献した者。

(応募資格)
第4条 各賞応募者の資格は下記による。
(1) 作品部門の応募者は正会員かつ応募作品の構造設計に必要な法的資格を有する者とする。
(2) 業績部門の応募者は正会員又は一般会員とする。

(応募部門と応募方法)
第5条 作品部門あるいは業績部門のいずれかで応募を受け付ける。
2 作品部門への応募作品は応募締切日で竣工後1年以上を経過したものとす。
(表彰者の選考と決定)
第6条 表彰者の決定は第10条に規定するJSCA賞委員会の推薦に基づき会長が行う。
2 既に受賞した者を同一名称の賞で重複して表彰しない。ただし、既に受賞した者であっても、異なる名称の賞で表彰することができる。

(賞の発表)
第8条 協会は表彰した作品及び業績を以下の方法で広く発表する。
(1) 表彰者による受賞講演及びパネル展示
(2) 協会機関誌及びホームページへの掲載
(3) 新聞社、雑誌社への公表及び他機関への紹介